

2017 JUA/EAU Academic Exchange Programme 参加報告

菅野 由岐子 (北海道大)

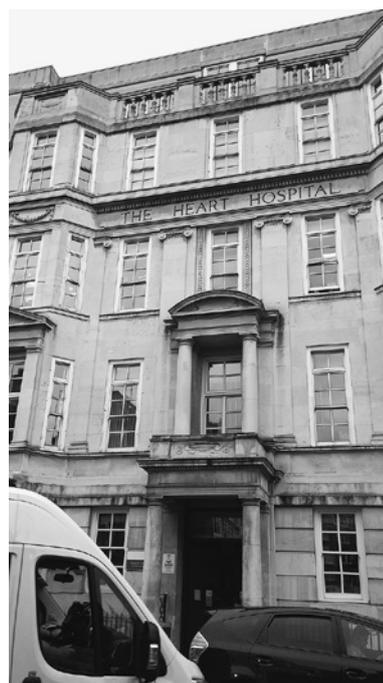
この度、2017 JUA-EAU academic exchange program 派遣要員に選考していただきまして、2017年3月18日～28日の日程でプログラムに参加しました。前半に施設見学を行い、後半にEAU annual meetingへ参加するという形で、今年の総会はロンドンでの開催であったために、ロンドン市内の施設見学となりました。昨年と同様に、台湾のフェロー3名と行動を共にし、幸せなことに二カ所の施設に訪問見学を引き受けていただきまして、充実したプログラムとなりました。

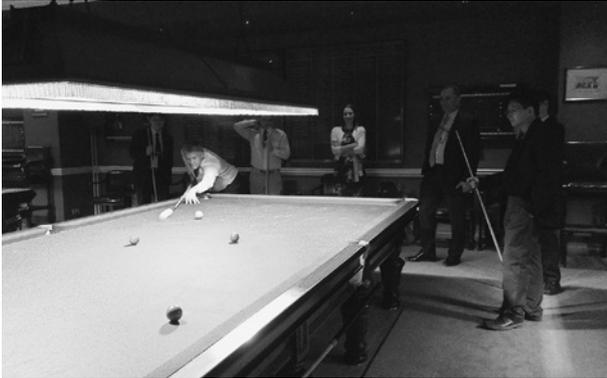
初めにUniversity College London(UCL)のProf. Kellyを訪問しました。見学に先立ち、前日にUCLの先生方とLondon Eyeの下の広場で初めてお会いし、London Eyeのプライベートキャビンでロンドンの景色を詳しく紹介していただきました。その後テムズ川沿いのレストランで会食をして、3月20日からの見学開始となりました。2日間のUCLでの施設見学では、Prof. Kellyを初めとして、UCLの錚々たるエキスパートたちによる最先端の臨床、研究のレクチャーがあり、その後ケースカンファレンスにも参加しました。Prof. Kellyからは、膀胱癌に対するThermo-chemotherapyのレクチャーがありました。私は恥ずかしながらそのような治療があることは初耳でして、Thermo-chemotherapyの器械も直接見ることができ、興味深いものでした。手術室では、RARPやPNLを見学し、放射線科医と泌尿器科医からなる合同チームでのPNLでは、手技の鮮やかさに目を見張りました。夜にはUCLのスタッフ、フェローが、地元のパブに連れ出してくれまして、二次会まで続くにぎやかなも

のとなりました。

次に、3月22日～23日にGuys hospitalのMr. O'Brienを訪問しました。前日のUCL訪問終了後、Royal Automobile Clubといわれる英国紳士の伝統ある会員制クラブで待ち合わせし、Mr. O'Brienはじめ、Guys Hospitalの先生方とディナー、ビリヤードを楽しみました(わたしはビリヤードでブービー賞でした)。ロビーの中央に高級車が飾ってあり、車関係の会員制クラブですが、自分はあまり運転はしない方だとMr. O'Brienが冗談をおっしゃっていました。普通なら一生足を踏み入れることのないようなエレガントな場所でした。

3月22日午前中は、Guys Hospitalのエキスパートたちとのclinical conference、それを受けての討論に参加しました。私は、後腹膜線維症による水腎症、腎機能障害に対してのUreterolysisについてのプレゼンテーションに大変興味を持ちました。実際に、Robot assistでのUreterolysisの手術も、術者の隣のコンソールで終始見学でき、わたしとしては肉眼的に後腹膜線維症の患者さんの後腹膜を見ることができたのも初めてです。尿管損傷も当然合併症としてあり得る術式において、細やかなタッチがとても勉強になりました。Mr. O'Brien自ら、すぐ近くのBorough Marketへ案内していただいたり、夜はGuys Hospitalのフェロー達に、ロンドンで最古といわれるバーや美味しいインド料理もごちそうしていただきました。また、Guys Hospitalには私の同僚の安部崇





重先生が留学中であり、久々の再会を喜びました。学内の Gordon Museum に連れて行っていただきましたが、膨大な病理標本を前に圧倒されました。

両施設とも、本当にホスピタリティに溢れ、私たちが歓待していただき、感謝しております。また、台湾のフェロー3名とも、イギリスの医療の現場をみながら、日本と台湾の医療についても意見を交わすことができ、一緒に行動できてよかったと思います。

総会では、Non-technical skills for Urological Surgeons (No TSUS) で、Uro Sepsis の患者へ緊急の尿管ステント挿入をするというシミュレーションを見学しましたが、臨場感を出すために、ドーム型テントの中で施行したり、麻酔器やカートなどの現物大の写真がおいてあって、一瞬本物の手術室と見紛うような空間でした。コメ



ディカルの言動やモニターの音で、わざと術者をさらに焦らすようなシナリオがあり、リアリティを追求してこそシミュレーションも本物に近づくのだろうと感じました。

今回、派遣していただいた日本泌尿器科学会、受け入れていただいた欧州泌尿器科学会および UCL の Prof. Kelly, Guys Hospital の Mr. O'Brien, 両施設の方々、長期の留守を許していただいた自施設の方々、道中何かと大変お世話になりました。東北大学の山下慎一先生、日本泌尿器科学会事務局の田中有希様、EAU 事務局の Angela 様に厚くお礼申し上げます。